

Title	バルスバーイ期カイ口の食糧騒動
Sub Title	Food disturbances in Mamluk Cairo during the reign of Sultan Barsbāy
Author	長谷部, 史彦(Hasebe, Fumihiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.84, No.1/2/3/4 (2015. 4) ,p.265(265)- 285(285)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第1分冊) 論文 東洋史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150400-0265

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バルスバリー期カイロの食糧騒動

長谷部 史 彦

一 はじめに

シャールバン二世期（一三六三―一三七七年）の後半からムアイヤド期（一四二二―一四二一年）にかけてマムルーク朝の首都カイロで頻発した食糧騒動や物価・救貧政策について論じた拙稿は、続くスルターン・バルスバリー al-Malik al-Ashraf Barsbay al-Zahiri の治世（一四二二―一三八八年）に関する検討を次なる課題と位置付けていた。その後、筆者は、マムルーク朝後期カイロにおける食糧騒動について政治文化史の視座から俯瞰し、オスマン朝期における同種の騒動との比較を試み^③、また、マムルーク朝の物価対策において注目される「神の価格」の含意について考察したが、上記課題への取り組みは果たせぬままであった。本稿は一九八八年の拙稿の続篇であり、

その目的は、これまで国際交易や都市の経済活動への積極的参入や専売制^⑤、さらにはキプロス遠征などの軍事・対外的な強硬姿勢によって特徴付けられ、「マムルーク朝スルターン権力の回春期（the Indian summer of the Mamluk sultanate）」^⑥などと評する向きもあるバルスバリー期に照準を定め、アラビア語年代記などの同時代諸史料の記事に関する検討を通じて、王都カイロを舞台とした食糧騒動とマムルーク朝政権の対応についてその実態や性格を解明することにある^⑦。

本論に入る前に、バルスバリー期のカイロにおける物価変動の特徴について言及しておきたい。本稿末尾の表はバルスバリーの治世における小麦、ソラ豆など主要食糧の価格変動についてまとめたものである^⑧。一四世紀末から一五世紀初頭にかけて顕著となった穀物価格の季節

変動の一般的傾向⁹⁾は、当該時期に入っても継続しており、投機性を強く帯びた穀物の売買などに起因した夏季のナイル増水期における急騰、春期の急落という変動パターンがやはり目立っている。そして、同時代の経世家マクリーズイーが問題視し、その年代記『諸王朝の知識の道程』(以下、『道程』と略記)の八三七年第一二月／一四三四年七月八月の記事において批判的に指摘したように、首都における穀価高騰には、買占め・退蔵行為や思惑売買に加え、商業利潤の追求にひた走る都市支配層の一部によるデマの流布(jiḥāf)も作用していたのである。¹⁰⁾

二 一四二五年一〇月の弾圧事件

一八二五年第四月／一四二二年三月にバルスバーイがスルターンとなり、その後しばらくの間、カイロでは穀物が安価で取引されていた。¹¹⁾しかし、八二七年第四月／一四二四年三月になると穀価は上昇に転じ、一イルダツプあたり一四〇銅貨デイルハム(dirham min al-fulus)であった小麦価格が二〇〇銅貨デイルハムになり、供給量が不足する事態となった。¹²⁾同年第九月二一日(コプト暦ミスラー月一三日)／一四二四年八月一七日、ナイルの水位は一六ズイラーウの「満水」に達したが、それに先

立って一時減水が観察されると首都の社会不安は高まり、買占めや売り惜しみの動きがみられた。¹³⁾アイニーの年代記記事によれば、その三日前に水位の上昇が一時止まると、住民(nas)が騒ぎを起こし(qajjat)、「小麦の船(marakib al-qamh)へと殺到した(tazāhamū)」という。¹⁴⁾住民は小麦を求めて「穀物河岸」へと参集し、荷揚げ前の小麦輸送船に押し寄せたのである。

結局この一四二四年夏の増水最高値は一七ズイラーウ一七イスバーであり、増水時の水位レヴェルとしては高くないとはいえず、通常であれば問題化する程ではなかった。しかし、大部分の村々(biḥād)が冠水せず、エジプトの灌漑農業は不調であった。¹⁵⁾マクリーズイーはその原因として、「時宜に合ったナイルの増水が不足したこと、それに、灌漑土手(jusūr)の整備についての関心の少なさ」を指摘している。これに続いて彼は、「というのは、灌漑土手の監督たち(kushshaf)の熱心なことといえは、彼らがその整備に赴いた時に彼ら自身と彼らの配下のために地方の財(māl al-hawāhī)を集めることだったからである」と地方行政の現状について批判の論述を残している。¹⁶⁾

かくして、地方灌漑行政の不備にも起因した冠水不足

の結果、冬作物の収穫期にあたる八二八年第七月／一四二五年五・六月にまずソラ豆価格が一イルダツプあたりで九〇銅貨デイルハムから一五〇へと急騰した。⁽¹⁹⁾その後、第八月／六・七月には、ソラ豆価格は二〇〇銅貨デイルハムに達した。⁽²⁰⁾マクリーズイーによれば、一イルダツプあたり一五〇であった小麦の価格も二〇〇銅貨デイルハムを超えるようになり、「穀物を見出すことが少なくなったが、人々はそれを求めたので、穀物の持ち主 (arbāb al-ghīā) たちと退蔵者たち (khaẓanāt-ha) の心は貪欲になった」という。⁽²¹⁾

第九月に入ると河岸 (sāhī) や取引所 (irās) に穀物が多くみられるようになり、一時穀価は下降して、同月二二日 (ミスラー月一四日) / 一四二五年八月七日、ナイルは「満水」を迎えた。⁽²²⁾しかし、翌第一〇月／八・九月に入ると小麦以外の物価が高騰し、第一一月／九・一〇月には、小麦も再度一イルダツプあたり二〇〇銅貨デイルハムを超える高値を示した。そして、第一一月二六日／一〇月九日、銅貨の不足によって銅貨・銅貨デイルハム間の公定交換比が銅貨一ラトルあたり九から二二銅貨デイルハムへと改定され、パン価格も上昇し、パン一枚が二銅貨デイルハムとなった。この時には、パン屋

(khabbāz) でも銅貨が不足する状態であった。⁽²³⁾またアイニーによれば、同年第一一・二月／九・一一月には小麦が一イルダツプあたり三〇〇銅貨デイルハム近くに、ソラ豆も三〇〇、大麦が二八〇に達し、パン一ラトル (一枚) が一・五銅貨デイルハムとなり、シリアでも穀価の上昇が顕著であった。⁽²⁴⁾『道程』にも第一二月における小麦の価格上昇と不足が確認されるが、そこでは、支配層や民間の穀倉 (shuwan, makhāzin) に実は多量の小麦が存在しており、ナイルの増水も充分であることが言い添えられている。⁽²⁵⁾

このように穀価の高騰、銅貨流通量の不足、スークにおけるパン不足という市況を示していたカイロで、八二八年第一二月七日／一四二五年一〇月二〇日、抗議行動が起こった。この騒動について、イブン・ハジャールの年代記には以下のようにある。

第一二月七日、小売商たち (bā) の状態が無視されていることと小麦が安価であるにもかかわらずパン価格の高騰が激しいことを理由として、ある集団 (ḡana) がムフタスイブのカーディー・バドル・アツィディーン・アルィアイニーに対して立ち上

がった (thara)。そして、彼らはスルターンに向かつて抗議したが、スルターンは彼らを助けることなく、彼らの中の一団を打ち、ある一団を脅し、約十人を投獄した。このため、諸店舗 (hawani) からパンが無くなり、彼らはパン焼き窯に殺到した。その後、経済状態は回復し、大麦・小麦・ソラ豆の価格が上昇したにもかかわらず、パンは多くなったのである。それは、後述するように翌年初めのことであった。⁽²⁶⁾

この記事からは、アイニーの市場行政、とりわけパン価格の高騰をめぐるヒスバ行政に対する不満から、首都において集団が形成され、抗議行動が展開されたことが読み取れる。そして、彼らがスルターン・バルスパイーに向かつて異議を申し立てたが、スルターンはこれに処罰や投獄をもって臨み、斯かる措置が市場におけるパンの不足を招き、これがパン焼き竈におけるさらなる騒動を引き起こしたことが窺われよう。

この騒動の一連の展開については、マクリーズイーによるさらに詳細な年代記記述がある。

当該箇所を訳出すれば、以下のとおりである。

同月(第一二月)七日、忌まわしい事件 (haditha shania) が起こった。それは以下のとおりである。市場 (aswad) ではパンを見出すことが少なくなつた。そして、カーヒラのムフタスイブであるアインタージョー (アイニー) Badr al-Din Mahmud al-Ayntabi が自宅から城塞に向かつて外出した時、民衆 (amma) が彼に対して叫んだ。さらに彼らは、アミールたちに対して救いを求め、ムフタスイブについての不平を訴えた (shakaw)。そこで、彼 (アイニー) はその道を迂回して、彼に対する投石 (rain) を怖れつつ登城し、スルターンに彼ら (抗議民衆) についての不平を訴えた。ところで、彼はスルターンと特別な関係にあり、スルターンのために、夜に諸王の歴史 (tawarikh al-muluk) を読み聞かせ、それをテュルク語 (Turkiyya) へと訳していたのであった。そのため、スルターンは怒り、アミールたちの一団をズワイラ門へと派遣したのである。そして、彼らは人々を捕えようと通行人たちから細路 (silak) の入口を奪った。そこで、ある非軍事奴隷 (bad' al-'abid) があるアミールに対して投石し、傷つけた。このため、その非軍事奴隷は

掴まって打たれ、人々の大集団が捕えられた。そして、彼らはスルターンの御前に引き出された。スルターンは彼らに対する胴体切断刑 (Fajr) を命じ、彼らをカイロ総督 (Wali) に引き渡した。そこで総督は彼らを打つと、鼻や耳を削ぎ、土曜日の夜、彼らを投獄した。翌日、彼らはスルターンの前に引き出された。そこで、スルターンは彼らを釈放した。彼ら赦された男の数は二二人であり、シャリーフからタージルまでがいた。そのために「人々の」心は見る影もなく変わってしまった、祈願 (du'a) やその他で「人々の」舌は絶叫したのである。

以上が『道程』の伝える事件の顛末である。その要点を列挙すれば以下のとおりである。

- (1) 抗議行動の主体は「民衆 (アーンマ)」であり、イブン・ハジャルの記述にも示されていたように、この騒動の主要な争点はパンの供給問題であった。(2) 民衆は市内でカーヒラのムフタスイブであったアイニーに対して抗議の言葉を浴びせ、アミールたちにムフタスイブに関する不満を訴えた。アミールたちの対応については不明である。また、

イブン・ハジャルの記事にある「スルターンへの抗議」についてマタリーズイーによる言及はみられない。

- (3) 民衆の投石を怖れたアイニーは、迂回路を通じて登城し、抗議民衆に関する苦情をスルターンに訴えた。

- (4) アイニーの訴えを聞いたバルスバーイは怒りの感情を露わにし、アミールたちを市内中心部へと派遣した。こうした王権による対応の背景には、アイニーが「諸王の歴史」を軍人支配層の言語であるテュルク語に翻訳して夜毎スルターンに読み聞かせるなど、王権との間に特別に親密な個人的交流を保持していた事実があったとする。

- (5) アミールたちが送り込まれたのはカーヒラの南門のズワイラ門付近であり、彼らはその界限の横丁に踏み込み、抗議行動の担い手たちを捕えようとした。

- (6) アミールたちによる犯人捜査に抗して、ある非軍事奴隷が投石を行ない、アミール一名が負傷し、当該奴隷のみならず多数の首都住民が捕縛された。

- (7) このようにして捕縛された人々に対して、スル

ターンは通常はマムルークの処刑方法として採用される胴体切断の死刑を命じたが、首都の警察長官であるカイロ総督が実際に執行した刑は鼻削ぎや耳削ぎであった。

(8) 刑の執行後、投獄されていた住民はスルターンの判断で釈放され、マクリーズイーによればその数は二人であった。彼らはすべて男性であり、その中には大商人、そして預言者ムハンマドの血統保持者であるシャリーフも含まれていた。⁽²⁸⁾

(9) バルスバリー政権による上記の住民への処罰、その残虐な仕置きは住民側に大きな動揺を引き起こした。

ここでとりわけ注目すべきは、捕縛された住民たちの人的な構成であろう。投獄された男たちの中には、一般に都市のアーヤーン(名士)ともみなし得るタージルやシャリーフから奴隷に至る、実に多様な首都の居住者たちが含まれていたのである。首都の物価高騰に直面した住民による抗議の動きに大商人や貴種の参加もあつたことが明示されている点において、カイロの食糧騒動史上特筆に値する事例といえるだろう。ただし、囚われた二人の男たちのそれぞれがムフタスイブのアイニーに対

する抗議行動へ実際に参加していたのかという点については定かでない。彼らの中には、アミールたちによる犯人捜査に反抗的態度をとつた者や反抗者に協力的姿勢をとつた者などが含まれていた可能性もあるだろう。タージル及びシャリーフについていえば、界隈の顔役的存在として住民意思を代弁するなどして捕縛されたのかもしれない。

簡潔な筆致で冷静に事実を伝えているイブン・ハジャールに対して、マクリーズイーがこの出来事を「忌まわしい事件」とし、ヒスバの不全状況を問題視する「消費者運動」へのスルターン権力の対応をめぐって、明らかに批判的な立場から詳述している点も注目される。歴史家マクリーズイーの「ベシズム」については特に欧米の研究者が好んで指摘するところであるが、ここでの彼の論述姿勢は、当該事例に先立つカイロにおける食糧騒動の諸事例に鑑みれば決して意外なものではないように思われる。⁽²⁹⁾これに先立つ時期と比較すれば、このケースにおけるバルスバリーの対応がまさに異例であり、マムルーク朝スルターンの権力の統治技法の「常道」からすれば、投石などの慣行的な抗議様式に基づき住民から不信任表明がなされたムフタスイブについては速やかにこれ

を解任し、代わりに別の人物を据えることがより適切な対処法であったといえよう。

本事例におけるスルターン・バルスバーイの斯様な対応には、マクリーズイーの指摘するように、スルターンがアイニーとの間に結んだ特別な人的絆が作用していたとみてよいだろう。⁽³⁰⁾ 八二九年一月一日／一四二五年一月二三日、アイニーは同職を解任され、代わって十騎長アミールのイーナル・アツシシユマーニー *Ḥal al-Shishmani* が着任することになるが、同年四月二七日／一四二六年三月八日、アイニーはエジプトのハナフィー派主席カーデー職という司法の最高位の一つに任命されている。⁽³¹⁾ シリア北方の境域地帯に出自をもつこの学者が、民衆運動の弾圧という「忌まわしい事件」の中心に位置していたにもかかわらず、あまり時を経ずにこのような栄達を実現しえたのは、何よりもバルスバーイとの強固な個人的結び付きによるものであったといえよう。⁽³²⁾

ところで、先に訳出したマクリーズイーの記述は、イブン・タグリー・ビルデーの年代記にほぼそのまま引用されている。そこでは引用に続いて、次のような追記がみられる。

そして、以上が彼（マクリーズイー）の述べたとおりである。しかし、両者（マクリーズイーとアイニー）の間には、古くも新しくも嫌悪の感情が存在したため、彼（マクリーズイー）は前述のインタービー（アイニー）に対する民衆（*amma*）の投石については沈黙し、そのことでインタービーの上に忌まわしさ（*shanā'a*）を強めようと欲したのである。⁽³³⁾

つまり、イブン・タグリー・ビルデーは、マクリーズイーの年代記記述について、民衆によるアイニーへの投石行為について明記しないのは結果的に住民への嚴罰を導いたアイニーの「忌まわしさ」を強調する意図があつてのことであり、個人的な嫌悪の感情によるという点において問題があると論評しているのである。⁽³⁴⁾ 確かにマクリーズイーの記述には「投石を怖れつつ」とあるのみであり、実際に投石行為があつたのかどうかについては明言されていない。この事件の際に少年であつた有力アミールの子イブン・タグリー・ビルデーは、投石行為に関する情報を事件発生時、またはその後獲得し、自らの事実認識に基づいてマクリーズイーを批判したもの

と思われる。

しかし、ここで確認しておきたいのは、問題のアイニーがイブン・タグリー・ビルデイーの師の一人であったといういまひとつの事実である。さらなる検討が必要ではあるが、イブン・タグリー・ビルデイーがマクリーズイーとアイニーの感情面の対立を指摘しつつ、アイニーの方に肩入れする内容の記述を付加したことについても、それが個人的関係に根差した情動の表現である可能性はあるのである。また、たとえイブン・タグリー・ビルデイーの指摘どおりに投石行為があつたとしても、民衆のこうした抗議作法がバルスバーイに先立つスルターンたちによつて事実上容認されてきたという歴史的事実を看過すべきではないだろう。民衆の動きとバルスバーイの対応について詳しく述べたマクリーズイーの立場は、慣行的作法による抗議に対してスルターン権力が弾圧をもつて対処したことに驚き、不満を抱く首都住民の方へと寄り添う性質のものであつた。事件当事者でありながら、自らの年代記においてこの事件に全く触れようともしないアイニーの記述態度と比べるならば、故郷の町に居住する民の生活世界への共感的視線を確保したマクリーズイーの叙述のもつ意義は明らかであろう。

三 その他の食糧騒動とバルスバーイ政権の対応

一四二五年一〇月に起きた上記の騒動から、一四三八年六月のバルスバーイの死去までの時期についてみれば、カイロで発生した食糧騒動の事例は限られている。以下、政権側の動きにも注意を払いつつ、年代記に確認される諸事例の概要を時系列的に整理し、検討を加えたい。

八二九年第二月／一四二五年一二月になると、再びカイロのストークでパンが、製粉所で小麦粉が不足し、同月半ばには小麦一イルダツブが三〇〇銅貨デイルハムを超え、食肉も不足する事態となつた。⁽³⁹⁾ 同月二九日／一四二六年一月一〇日、パンを求めて住民 (*bas*) がパン焼き窯 (*atfan*) へと殺到し (*izdahama*)、また小麦の購入に奔走した。マクリーズイーによれば、「問屋商人 (*khazzan*) の心はそのことに貪欲となり」、ソラ豆一カダフ (*qadaq*)、九六分の一イルダツブ) が四銅貨デイルハム、つまり一イルダツブあたり三八四銅貨デイルハムという高値を記録した。⁽⁴⁰⁾

マクリーズイーはこの物価騰貴の要因として、(一) ムフタスイブのアイニーが小売商たちの行動を放任し、

その後任のシシユマーニーが一転して彼らを脅し暴行を加えたこと、(2) 水牛と牛の大量死、(3) 強風によるナイル水運の途絶とカイロの河岸における穀物取引の中止、(4) ガザ、ラムラ、エルサレム、ナーブルス、シリア海岸地帯、ダマスクス、ハウラーン、ハマーなどシリア各地における物価高、すなわちエジプトのイルダツプ換算で一〇〇銅貨デイルハムという高値、(5) 穀物生産地の上エジプトにおける物価高とパン不足などを挙げている。さらにマクリーズイーは、小麦価格がイルダツプあたり二五〇銅貨デイルハムとなった際に百騎長アミールが「私は自分の小麦を三〇〇『銅貨』デイルハム以外では売らない」と発言したことを取り上げて、軍人支配層による投機的な穀物取引の問題点に読者の注意を喚起し、またスルターンが保有穀物の少なさから自己の穀倉から市場への穀物供給を禁じたことの影響についても指摘している。⁽⁴¹⁾その後、同年第三月半ば／一四二六年一月末以降、穀価は下降傾向を示した。⁽⁴²⁾第三月二日以降、期間や規模は不明であるが、スルターン・バルスバリーが救貧事業として貧民 (fugara) へのパンの分配を毎日実施し、⁽⁴³⁾これがあがる程度の効果を示した可能性もある。

次に史料で確認される食糧騒動は、八三六年第一二月二九日 (ミスラー月二三日) / 一四三三年八月一七日、ナイルの増水が遅れるなか、僅かな減水が記録された際のものである。この時、前月に一〇〇銅貨デイルハムであった小麦一イルダツプの価格が一四〇に上昇し、人々 (nas) は小麦の購入へと殺到し (izdahama)、小麦価格はさらに上昇した。⁽⁴⁴⁾他方、イブン・ハジャルの年代記には、「人々 (nas) が騒いだ (dajja)」とある。⁽⁴⁵⁾

八三九年四月二四日 / 一四三五年一月一六日には、同月に入ってから物価の上昇を背景として、カイロの民衆による直訴、すなわち直截的な請願行動がみられた。この日、バルスバリーが狩りに出ようと市内を騎行していると、民衆 (amma) が騒ぎ (dajja)、支配層の穀倉 (shuwan) に小麦が多量に存在するにもかかわらず、スークでパンが不足していることについて救済を求めた (istaghathu)。しかし、スルターンは「彼らの方に振り向かなかつた (lam yaltahft ilay-hum)」という。⁽⁴⁶⁾このように民衆によるスルターンへの対策要求は無視されたかみえるが、他方、イブン・ハジャルは、民衆が騒いだ (dajja) ことを受けて、結局スルターンが穀倉を開いたと述べている。⁽⁴⁷⁾

以上のように、一四二五年一〇月の弾圧事件以降、表にまとめたとおり、夏季の増水期を中心に投機的取引が主因とみられる穀価の乱高下現象がしばしば起こっていたにもかかわらず、民衆運動の発生に関する史料記述は多いたとはいえない。その背景として指摘すべきは、前述の弾圧事件において明示され、一四三五年一月の事例にも窺うことができる、スルターン・バルスバリーの統治の多分に非対話的な性格であろう。そしてそれは、首都のヒスバ行政を担う人物の選定とも連動していたようにみえる。イーナール・アツシシユマーニーは八三三年四月四日／一四二九年一月三十一日のアイニーのムフタスイブへの再任までムフタスイブの職にあり、その後、問題のアイニーの再任期が八三五年七月／一四三二年三月まで続いたが、こうしたヒスバ体制は、住民にとつてみれば抗議行動を起こしにくい性格のものであったと推断されるのである。⁴⁸すなわち、十騎長アミールによる武力によるヒスバ行政に続き、抗議・要求行動が前代未聞の厳罰に帰結した事件の当事者であったアイニーが再任されたことによつて、住民は直接行動を躊躇したに違いない。

ただし、一四三二年三月以降については若干の変化も

認められよう。この時期にカーヒラのムフタスイブを務めたのは、ムハンマド・ブン・ナスルラーフ Saḥān al-Dīn Muhammad b. Badr al-Dīn Hasan b. Naṣr Allāh である。小ハージブ (ḥājib saḥūr) ⁴⁹であったこの官僚名家出身者の就任をもつて、市場行政は、民衆による物価高騰時における異議申し立てが比較的容易な体制へと移行したようにもみえるのである。そして、上述のように一四三五年に食糧問題をめぐるスルターンへの直訴がバルスバリー統治期において初めて実行されたことは、まさにこうしたヒスバ体制の変化との関わりにおいて理解すべきものと思われる。

四 バルスバリーの物価政策と穀物市場への参入

以上のように、特にその治世前期を中心に、穀物問題をめぐつて首都住民が異議申し立てを実行し難い体制を構築したバルスバリーであるが、食料の不足や価格上昇への対策が全く放棄されていたというわけではない。以下では、バルスバリー政権による物価対策、及び物価に影響を与えたスルターンの穀物取引について検討し、当該時期の穀物市場に対するスルターン権力の態度につい

て考察することにした。

八三〇年第一月下旬／一四二七年九月中頃、ナイル水位の減少を契機に穀物の買占め行動が広がりをみせ、市場供給量が不足した。この時、バルスバリーはムフタスイブのシシュマーニーを通じ、小麦一イルダツブあたり一五〇銅貨デイルハム以上で売ること、そして個人が一〇イルダツブを超えて小麦を購入することを禁じた。

当時は物価上昇を期待する富裕者による買い溜めの傾向が顕著であり、「記すに値しない人物」が一〇〇〇イルダツブの小麦を買い込むといった有様であった。⁵⁰つまり、ここでのバルスバリー政権の施策は、基本的にタスィール(価格の公定)、及び買占めの抑止を目的とする小麦購入量の上限定であったといえよう。

八三一年第一月／一四二八年八月以降、小麦、大麦、ソラ豆価格が上昇し、マクリーズィーの表現によれば、「公益 (masalih) が見失われる状態」となった。そして同年第一二月／一四二八年九一〇月には、穀倉内に多く存在するにもかかわらず退蔵行為のため供給量が減少してしまい、小麦一イルダツブが四〇〇銅貨デイルハムに達したが、その後、小麦価格は少し下降し、三五〇銅貨デイルハムとなった。⁵¹イブン・ハジャールによれば、こ

の時、スルターンやその他の穀倉 (shuwan) が開かれたという。⁵²その意図に関しての説明は史料にないが、一連の展開からは、値崩れを察知したバルスバリー、さらにおそらくはアミールたちが自らの保有する穀物を慌てて市場へと放出したものと推察される。これを物価安定のための廉価販売策とみなすことはできないと思われるのである。

八三二年第七月／一四二九年四・五月には、スルターン王室の商業部門であるマトジャール・スルターンニー (matjar al-sultani) によって、大商人たち (tujjar) を対象とした数品目についての購入強制 (タルフ、farḥ) が行なわれた。具体的な品目名は史料に記されていないが、スルターン権力による斯様な利益追求によって、小麦価格は一イルダツブあたり二二〇銅貨デイルハムから三〇〇へと上昇した。⁵³

スルターン権力による同様のタルフは、八三八年第二月／一四三四年九一〇月にも行なわれた。この時、バルスバリーはスルターンの穀倉 (shuwan) から一万イルダツブのソラ豆を取り出すと、「果樹・菜園 (basatin)、压榨所 (masajir)、その他の機械 (dawalib) の保有者」に対して一イルダツブあたり一七

五銅貨デイルハムで買い取りを強要した。当時のソラ豆価格は不明であるが、穀物は安価(akhta)であったという。こうしたスルターンの動きが被害を与えた事実が史料に記されていることからすれば、高値での購入強制であったことは明白である。さらに、マクリーズイーによれば、その翌月にも新任ワズイールのジャマール・アッディーン Jamāl al-Dīn Yūsuf b. Kaṭīb Jakam によって、ソラ豆一万八〇〇〇イルダツブと小麦八〇〇〇イルダツブのタルフが断行され、人々に被害を与えたという。以上のようなタルフは、胡椒や砂糖の専売制に代表されるスルタンによる商業活動への積極的参入と連動した経済行動であったといえよう。すなわち、それらはいずれも、大量の穀物を保有する王権の市場における利益の追求行為であり、これを首都の物価安定を目的とした施策とみなすことはできないのである。

そして、注意すべきは、このようなスルタン・バルスバーイの穀倉への小麦やソラ豆の貯蔵は、王領地の農民たちの税負担だけでなく、穀物市場における購入にもよっていたという点である。たとえば、八四〇年第六月／一四三六年一二月・一四三七年一月、バルスバーイは貯蔵を目的として三万イルダツブの穀物を購入するよう

指示を与えている。こうしたスルタン権力の動きは、明らかに救荒目的ではなく、拔群の財力を用いての穀物商業への積極的関与とみるべきであろう。マクリーズイーは、この時に民間で物価高騰を危惧して小麦、大麦、ソラ豆を購入する動きがあったことを伝えている。つまり、穀物貯蔵をめぐるバルスバーイの積極性は、王権による危機への備えとして都市社会全般に安心をもたらすものではなく、穀価高騰への危機感を煽る性質のものであったといえよう。斯様な局面におけるスルタン権力について、これをパターナリズム(父権的温情主義)の実践主体とみなすことはできない。むしろ、巨大な財力や政治権力の行使によって、穀物の取引ゲームで圧倒的に振舞うプレイヤーとしてのその姿を首都社会に向かつて明示していたといえるのではなからうか。

八三三年第三月／一四二九年一二月の事例では、スルタンが備蓄穀物を市場へ売却するに際して、ムフタスイブのシシュマーニーがフスタートとブーラークの両河岸に穀物を売りに来た穀物商人たちに対して一定期間売却を禁止する措置をとっている。この時、スルタンの備蓄小麦は一イルダツブあたり三六〇銅貨デイルハムという高値で優先的に売却されており、その後、製粉

所への小麦供給量が充分になった後に、農村から小麦を持ち込む輸送商人のジャッラーブ商人たちは売却を許可されたのであった。かくして小麦不足が解消され、価格が下降したことを諸史料は伝える。このような展開は、もしもスルターンの備蓄穀物が適正価格で市場に順調に供給され続けていたならば相場は安定していたのではないかと推察を促す。本事例は、「国王大権」を行使する当該のスルターン権力が首都の穀物相場に圧倒的な影響力を及ぼし得る存在であったという実状を如実に示すものである。

八三九年第四月末／一四三五年一月の物価高騰時には、前述のように民衆運動への対応として、バルスバリーがおそらくは自身の穀倉 (shuwan) を開き、そこから穀物売るように命じている。そこでの売却価格・量については史料記述がなく、廉売策であったのかどうかは不明である。そして、イブン・ハジャルによれば、その後穀価の上昇がみられたが、市場供給量は増加したと⁽⁸⁾いう。

以上のように、物価対策の実施を明示する史料記事は、一四二七年九月のタスイルと一四三五年一月の穀倉開放の二つの事例に限られている。そして、バルスバリー

イが穀物の市場や相場に関与していた事実を伝えるその他の史料記述は、スルターン権力が活発な穀物取引に手を染め、強権を背景に利益追求を図っていたことを伝えている。バルスバリーによる穀物市場への積極的参入は、カーリミー商人の没落や移住を惹き起こした胡椒や砂糖の専売制のような徹底管理をめざす施策ではなかった。しかしながら、抜群の政治・経済力を誇るスルターンによる市場ゲームへの強引な割り込み行為であったという点に着目するならば、それらは基調において共通した傾向を持つていたとみなし得るのではないだろうか。

五 おわりに

一四二四年から一四二六年にかけて三次にわたって実行されたキプロス島への大規模な遠征軍の派遣は、キプロス王の捕縛とカイロへの連行に帰結したが、それは、後期マムルーク朝の政治文化の諸側面にも少なからず影響を与えたとみるべきである。東地中海世界におけるヨーロッパ・キリスト教勢力の前線基地であった同島の政治・経済的従属を実現したこの目覚ましい「功績」によって、スルターン・バルスバリーは、バイバルス一世、カラーウーン、ハリールといったマムルーク朝初期の

「聖戦の英雄スルターン」にも連なり得るような統治者イメージを久方ぶりに民心に刷り込める立場を獲得したからである⁽⁶⁾。他方、バルスバーイは、首都の穀物取引に積極的に関わり、商業の多分野において利益追求に励みながら、その対外的な強硬姿勢を国内、とりわけ首都社会に向けても明示し、消費者たちの経済的不満を力で制圧することを厭わない新しいタイプのチェルケス系スルターンであった。本稿において論じてきた食糧騒動への対応に限っていえば、パターナリズムから離脱して抑圧へと進みがちであったこのような統治態度は、ムアイヤドをはじめ彼に先立つチェルケス・マムルーク朝スルターンたちとは明瞭に一線を画す性質のものであったとすることができよう。そして、別稿において既に詳論したように⁽⁴⁾、このバルスバーイの東地中海における対外積極策を引き継ぎ、一四四〇年代にロドス島への派兵を繰り返したスルトーンのジャクマク(在位一四三八―一五三年)は、民衆運動への対処法においてこの先達の強権的な政治姿勢を踏襲して行くこととなったのである。

註

(1) 拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧暴動」

『史学雑誌』九七卷一〇号(一九八八年)、一―五〇頁。

(2) 拙稿「イスラーム都市の食糧騒動―マムルーク朝時代カイロの場合」『歴史学研究』六二二号(一九九〇年)二二―三〇、五三頁。

(3) 拙稿「尖塔の上のドウアールカイロの民衆蜂起・一七二四年一月」『イスラム世界』四二号(一九九三年)、四七―六三頁、拙稿「オスマン朝統治下カイロの食糧騒動と通貨騒動」『東洋史研究』五三卷二号(一九九四年)、一一四―一三三頁、拙稿「ミナレットにおける異議申し立て―前近代アラブ都市の諸事例に関する覚書」『史学』七二卷三・四号(二〇〇三年)、一一三―一二八頁。

(4) 拙稿「アドルと『神の価格』―スークのなかのマムルーク朝王権」三浦徹・岸本美緒・関本照夫編『比較史のアジア―所有・契約・市場・公正』東京大学出版会、二〇〇四年、二四五―二六三頁。

(5) 専売制の実施をはじめとしたバルスバーイの紅海・ピジャーズ・インド洋政策については、Ahmad Darag, *L'Égypte sous le règne de Barsbay, 825-841/1422-1438*, Damas: Institut français de Damas, 1961, pp. 159-237; Subhi Labib, *Handelsgeschichte Ägyptens im Spätmittelalter (1171-1517)*, Wiesbaden: Franz Steiner, 1965, pp. 377-387; Elyyahu Ashtor, *Levant Trade in the Later Middle Ages*, Princeton: Princeton University Press, 1983, pp. 284-303; John L. Meloy, "Imperial Strategy and Political Exigency: The Red Sea Spice Trade and the Mamluk Sultanate in the Fifteenth Century", *Journal of the*

American Oriental Society, 123 (2003), pp. 1-19 を参照の
ら)。(9)

(9) Peter M. Holt, *The Age of the Crusades: The Near East from the Eleventh Century to 1517*, London & New York: Longman, p. 184.

(7) フムルーク朝期カイロの食糧騒動に関する注目すべき研究に Boaz Shoshan, "Grain Riots and the Moral Economy: Cairo, 1350-1517", *Journal of Interdisciplinary History*, 10/3 (1980), pp. 459-478; Id., *Popular Culture in Medieval Cairo*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993, pp. 52-66 があるが、これに対する筆者の見解については拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧暴動」(一―二頁)及び拙稿「書評 ホマズ・シヤン著『中世カイロの民衆文化』」、『イスラム世界』四七号(一九九六年)七七八―八七頁; Fuminiko Hasebe, "Popular Movements and Jaqmaq, the Less Paternalistic Sultan: Some Aspects of Conflict in the Egyptian Cities, 1449-52", *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 20/2 (2005), pp. 27-28 を参照された。

(8) バルスバーイ期の物価変動表として既に Eliyah Ashor, *Histoire des prix et des salaires dans l'Orient medieval*, Paris: S.E.V.P.E.N., 1969, pp. 289-290, 305, 308 & Boaz Shoshan, "Money Supply and Grain Prices in Fifteenth-Century Egypt", *The Economic History Review*, 36/1 (1983), pp. 47-67 があるが、ハンや小麦粉の価格変動に注意を払うとともに年代記諸史料からゆかに

バルスバーイ期カイロの食糧騒動

多くのデータを集めて本表を作成し直した。なお、表中の「購入強制」とは軍人によるタルフ (tarḥ) を指す。

(9) 拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧暴動」(6―8頁)。

(10) Al-Maqrīzī, *Kitāb al-Sulūk li-ma'rifaṭ dawlat al-mulūk*, 4 vols., Cairo: Dar al-Kutub al-Miṣriyya, 1943-72, vol. 4, p. 920 及び拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧暴動」(一―二頁)。

(11) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 625, 628, 630-31, 634, 636-37; Ibn Ḥajar al-ʿAsqalānī, *Inḥā al-ghunnā bi-dawāʾ al-ʿimr*, 4 vols., Cairo: Lajnat Iḥyāʾ al-Turāth al-Islāmī, 1969-98, vol. 3, p. 301; al-Aynī, *ʿIqd al-jumʿān fi tarīkh ahl al-zamān*, ʿAbd al-Rāziq al-Ṭanṭāwī al-Qarmūṭ (ed.), Cairo: al-Zahrāʾ li-Ṭīām al-ʿArabī, 1989, pp. 197-198.

(12) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 660. 銅貨はトルコに「*ḥusḥ*」Boaz Shoshan, "From Silver to Copper: Monetary Changes in Fifteenth-Century Egypt", *Studia Islamica*, 56 (1982), pp. 97-116 を参照された。

(13) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 668; Ibn Ḥajar, *Inḥā al-ghunnā*, vol. 3, p. 329. 464. マニーの年代記には「*ḥusḥ*」(一三三)日(464) (al-Aynī, *ʿIqd al-jumʿān*, p. 238)。

(14) Al-Aynī, *ʿIqd al-jumʿān*, p. 238.

(15) カイロの川の河港「*ḥarāṭ*」と「*ḥarāṭ*」に「*ḥarāṭ*」Ira M. Lapidus, "The Grain Economy of Mamluk Egypt", *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 12

(1969), pp. 1-15; Nelly Hanna, *An Urban History of Baghdad in the Mamluk and Ottoman Periods*, Cairo: Institut français d'archéologie orientale, 1983, pp. 42-43及び拙稿「一四世紀末—一五世紀初頭カイロの食糧暴動」三八頁を参照された。

- (16) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 669.
- (17) Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunnr*, vol. 3, p. 329; al-'Aynī, *Ṭiqd al-jumān*, p. 288.
- (18) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 678.
- (19) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 687. マクリーズニーによれば、ダマスカスにおいて小麦の頭穀価が上昇したと云ふ。
- (20) Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunnr*, vol. 3, p. 351; Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 691 には、一ペニーナールとある。
- (21) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 691.
- (22) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 693-94; al-'Aynī, *Ṭiqd al-jumān*, p. 288.
- (23) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 697; Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunnr*, vol. 3, p. 348.
- (24) al-'Aynī, *Ṭiqd al-jumān*, pp. 252-53.
- (25) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 699.
- (26) Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunnr*, vol. 3, p. 350.
- (27) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 698.
- (28) マムルーク朝期のエジプト社会におけるシャリーフの事態に関しては未解明の部分も少なくないが、バルスバリー期には、例えば、八三三年第六月／一四三〇年二月三月、ベストの流行拡大に際して、ムハンマドという名のシャリーフ四〇人がアズハル・モスクに集められ、手当支給の後、集団でのクルアーン朗誦とベスト退散の祈願(ドウアー)の儀式が執り行われた。これはスルターンの命により、当時文書庁長官であったシャリーフのイブン・アドナン Shihab al-Dīn Ahmad b. 'Adnan によって主催され、東方地域 (biḥād al-mashriq) の方法を踏襲したものであったとされる (Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 828-829; Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunnr*, vol. 3, p. 438)。
- (29) 拙稿「一四世紀末—一五世紀初頭カイロの食糧暴動」一七—二五頁及び拙稿「イスラーム都市の食糧騒動」二四—二六頁。
- (30) バルスバリーとアイニーの親密な関係については、人名表記などに少々難のある論考ではあるが、Anne F. Broadbridge, "Academic Rivalry and the Patronage System in Fifteenth-Century Egypt: al-'Aynī, al-Maqrīzī, and Ibn Ḥajar al-'Asqalānī", *Mamluk Studies Review*, 3 (1999), pp. 95-97 を参照のこと。
- (31) Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunnr*, vol. 3, p. 364. 他方、アイニーは「カーヒラとミッスルのムフタスイフからの解任をヒジュラ暦八二九年二月半はのこととしている (al-'Aynī, *Ṭiqd al-jumān*, p. 294)」。バルスバリー期カイロのヒスバ職保持者たちについては、菊池忠純「マムルーク朝時代カイロのムフタシブー出身階層と経歴を中心に」『東洋学報』64/1・2 (1983), pp. 146-147 を参照のこと。

(32) Al-Maqrizi, *al-Suluk*, vol. 4, p. 717; al-'Ayni, *Iqd al-jumân*, p. 297.

(33) 更なる検討を要するが、信頼を置く側近を突如重職に拔擢する手法は、バルスバーイの治世に特徴的であったようにみえる。その最たる例が、側近の「王の道化 (mudhik)」であったイブン・カースィム Waly al-Din Muhammad b. Qasim al-Mahallî のヒジャーズ両聖地の重要管理職への任命である。詳しくは「拙稿「マムルーク朝期メディーナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」今谷明編『王権と都市』思文閣出版、二〇〇八年、二二一―二二七頁を参照された。

(34) 以下、Ibn Taghri Birdî, *al-Nujûm al-zâhira fi muluk Misr wal-Qahira*, 16 vols., Cairo: Matbatat Dar al-Kutub al-Misriyya & al-Muassasa al-Misriyya al-'amma, 1929-72, vol. 14, pp. 281-82. イブン・タグリー・ビルデーの引用記事が『道程』の記事と異なるのは、事件の開始を金曜日であると明記している点と「通行人から細路の入口を奪った」という部分で「通行人から」が削除されている点である。

(35) マクリースイーとアイニーの対立的関係については、Broadbridge, "Academic Rivalry and the Patronage System", pp. 85-107 を参照のこと。ネッペ⁴⁴、マクリースイーのアイニーに対する見方を検証する部分でこの事件記事が取り上げられている。

(36) アイニーとイブン・タグリー・ビルデーの師弟関係については、とりあえず Muhammad Musjafata Zyada, *al-*

バルスバーイ期カイロの食糧騒動

-Mta'arrikhân fi Misr fi al-qarn al-khâmis 'ashar al-miladi, Cairo: Matbatat Lajnat al-Talif wal-Tarjama wa l-Nashr, pp. 29-30; Sami G. Massoud, *The Chronicle and Annalistic Sources of the Early Mamluk Circassian Period*, Leiden: E. J. Brill, 2007, p. 62 を参照のこと。

(37) 拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧騒動」二六頁、長谷部「イスラーム都市の食糧騒動」二四―二五頁、Hasebe, "Popular Movements and Jaqmaq", pp. 46-47 note 22.

(38) アイニーの年代記におけるヒジュラ暦八二八年の記事には、自らがムフタスイブ職にあったこと、第一二月二二日及び二九日の出来事について述べられているにもかかわらず、騒動や処罰に関する言及は見当たらず (al-'Ayni, *Iqd al-jumân*, pp. 245-288)。アイニーの年代記の史料性格については、Nobutaka Nakamachi, "Al-'Ayni's Chronicles as a Source for the Bahri Mamluk Period", *Orient*, 40 (2005), pp. 140-171 を参照のこと。なお、バルスバーイ期についてアイニーの年代記に依拠する傾向の強いイブン・アッサイラフィーも、同年に関して詳述しつづも本事件について何も伝えていない。Ibn al-Sayrafi al-Jawhari, *Nuzhat al-nuflis wal-'abdan fi ta'wârîkh al-zaman*, 4 vols., Cairo: al-Hay'at al-Misriyya al-'amma li-l-Kitâb, 1970-1994, vol. 3 を参照のこと。

(39) Al-Maqrizi, *al-Suluk*, vol. 4, pp. 709-710. ネッペは、食肉不足について、スルターンのマムルークの消費用に毎日二万二〇〇〇ラトルが必要であったことが述べられ、

二八一 (二八一)

宮廷の食肉需要の大きさが指摘されている。

- (40) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 710.
- (41) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 710-11.
- (42) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 715.
- (43) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 712. 食糧危機に際してのスルターンによるパンの配給については、拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧暴動」(二六―二九頁を参照されたい。バルスバリーによるワクフ設定以外の救貧事業としては二例が確認されるが、いずれも物価高騰時の活動ではない。一つは、病床にあったバルスバリーが八三七年六月―一四三四年一―二月に善行として貧民への財の分配を行なった例であり、もう一つは、八四一年第一〇月―一四三八年三―四月のペスト流行時の貧民への喜捨の事例である (al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 910, 1037)。後者に際しては、貧民の殺到で混乱が生じ、これに怒ったバルスバリーは、ハラーフイーシユの長 (sulṭān al-ḥarāfiṣh) や「諸集団の長 (shaykh al-tawāif)」を呼び付けると訓告し、浮浪者たち (ju'aydiyya) による路上の物を乞いを禁止した。これに対して、市中ではスルターンへの神罰を求めめる祈願が行なわれた。マクリースイーは、この神罰祈願とスルターンが死の床に就いたこととの間の因果関係を示唆する。
- (44) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 894. この記述に依拠したとみられるイブン・アッ＝サイラフイーは「人々は小麦の購入に急いだ」と言い換えている。In al-Sayrafi, *Nuzhat al-nufūs*, vol. 3, p. 263を参照のこと。
- (45) Ibn Hajar, *Inbā' al-ghunnur*, vol. 3, p. 499.
- (46) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 964. Ibn al-Sayrafi, *Nuzhat al-nufūs*, vol. 3, p. 338 に於て「民衆 (awāmm) が彼 (スルターン) に抗議した (waqata) 」と言ひ換えられ、「彼 (スルターン) は彼らに注意を払わず、振り向かなかつた」と記され、少し詳しい説明になつてゐる。
- (47) Ibn Hajar, *Inbā' al-ghunnur*, vol. 4, pp. 10, 12.
- (48) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 820, 867. Ibn Hajar, *Inbā' al-ghunnur*, vol. 3, pp. 436, 476. アーニーの記事 (al-Aynī, *Iqd al-jumhūr*, p. 373) によれば、アーニーの再任に際し前任者のイーナールは上エジプトにスルターンが保有する村々の土地調査 (misā'la) に赴いたと云ふ。
- (49) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 867; al-Aynī, *Iqd al-jumhūr*, p. 418. イブン・ナスルミーフに於ては 'Bernadette Martel-Thoumian, *Les civils et l'administration dans l'état militaire musulman (IXe/XVe siècle)*, Damas: Institut français de Damas, 1991, pp. 212-225 を参照のこと。彼は八四〇年第一月―一四三七年六月に中東文書局長官 (naẓir al-ḥakāss) の重職を兼務する間に於ける (al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 1011-1012)。
- (50) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 750-51.
- (51) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 782-783; al-Aynī, *Iqd al-jumhūr*, p. 328.
- (52) Ibn Hajar, *Inbā' al-ghunnur*, vol. 3, p. 405.
- (53) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 801.
- (54) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 933. イブン・アッ＝サ

イラフイーの記事によれば、当時のソラ豆価格は一五〇銅貨ティルハムであった。⁽⁵⁵⁾ Ibn al-Sayrafī, *Nuzhat al-mufīṣ*, vol. 3, p. 306 を参照のこと。

(55) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 934. 官僚名家のカーティブ・ジャカム家については Martel-Thouman, *Les cirils et l'administration*, pp. 283-294 を参照のこと。

(56) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 1004. スルターンに穀物の買い付けは、穀価の低かった八三五年第一〇月／一四三二年六月にも実施されたが、その際にはエジプトの諸地方 (amāl Miṣr) における買い付けを命じた上で、自らが十分に穀物を確保できるように、フスタートヤブーラーク⁽⁵⁷⁾の河岸で活動する穀物仲買人 (samāstrat al-ghalla) に対して一時売却の停止を命じる措置が取られた。⁽⁵⁸⁾ Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 872 を参照のこと。

(57) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 820; Ibn Ḥajar, *Inbāʾ al-ghunn*, vol. 3, p. 436.

(58) Ibn Ḥajar, *Inbāʾ al-ghunn*, vol. 4, p. 12.

(59) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 721-726.

(60) トムルーク朝初期の聖戦の英雄王イメーンに ついては、ハイブルス一世に関する Peter M. Holt, "The Virtuous Ruler in Thirteenth-Century Mamluk Royal Biographies", *Nottingham Medieval Studies* 24 (1980), pp. 27-35 を参照のこと。

(61) Hasebe, "Popular Movements and Jaqmaq", pp. 44-45.

表 ハルズナーイ期カイロの物価変動

ヒソエヲ歴年月日	西暦年月日	小麦価格 (Itrdabb)	ソラ豆価格 (Itrdabb)	大麦価格 (Itrdabb)	小麦粉価格 (Ibaqia)	パン価格 (Itrai)	典拠
825年	1421年12月-1422年12月	250dL	70or80dL	70or80dL		2→1.5dLに公定	<i>Iqd.</i> 165
825年 第9月	1422年8-9月	150dL	80dL	85dL		3/4dL	<i>Sutah</i> vol.4, 618 <i>Iqd.</i> 197
826年 第2月	1423年1-2月	60→90dL	75or70dL	65or60dL	35dL	0.5dL	<i>Sutah</i> vol.4, 630
第2月	1423年1-2月	0.2dinar					<i>Ibā</i> vol.3, 301
第4月 20日	1423年4月2日	60dL				1/3dL	<i>Sutah</i> vol.4, 634
第5月	1423年4-5月	80dL					<i>Sutah</i> vol.4, 636
第6月	1423年5-6月	100→120dL	70dL	70→100dL			<i>Iqd.</i> 197-98
第10・11月	1423年9-11月	120→150dL	70dL	60dL			<i>Iqd.</i> 197-98
第11月	1423年10-11月	140dL	70dL	70dL			<i>Sutah</i> vol.4, 646
827年	1423年12月-1424年12月	120→140→200→210dL	60→70→100dL	45→50→90→100dL		1dL	<i>Iqd.</i> 237
827年初頭	1423年12月						<i>Iqd.</i> 237
第4月	1424年3月	140→200dL					<i>Sutah</i> vol.4, 660
第10月	1424年8-9月	70dLの上昇					<i>Ibā</i> vol.3, 328
第11月	1424年9-10月	180dL	80dL	85dL			<i>Sutah</i> vol.4, 672
年末	1424年11月						<i>Iqd.</i> 237
828年初頭	1424年11月	200dL	110dL	110dL		1dL (10or9orqayya [㊦])	<i>Sutah</i> vol.4, 678
第7月	1425年5-6月		90→150dL				<i>Sutah</i> vol.4, 687
第8月	1425年6-7月	150→200dL以上	1dinar				<i>Sutah</i> vol.4, 691
第8月	1425年6-7月		200dL以上	150dL			<i>Ibā</i> vol.3, 351
第11月	1425年9-10月	200dL					<i>Sutah</i> vol.4, 697
第11月	1425年9-10月	300→250dL	300dL				<i>Ibā</i> vol.3, 351
第11月末	1425年10月半ば						<i>Sutah</i> vol.4, 697
第11・12月	1425年9-11月	300dL逆く	300dL	280dL		1dL	<i>Iqd.</i> 252-53
829年 第1月 11日	1425年11月23日	250dL (その後300dLに)	300dL	300dL		1.5dL	<i>Ibā</i> vol.3, 364
第2月半ば	1425年12月末	300dL以上	300dL				<i>Sutah</i> vol.4, 710
第2月 29日	1425年1月10日		384dL				<i>Sutah</i> vol.4, 711
第3月 1日	1426年1月11日	300dL					<i>Sutah</i> vol.4, 712
第3月半ば	1426年1月未		400→300dL	1dinar Ashraf			<i>Sutah</i> vol.4, 715
第5月	1426年3-4月				120dL		<i>Sutah</i> vol.4, 718
第5月	1426年3-4月	2→1dinar			150→80dL		<i>Ibā</i> vol.3, 364
830年初頭	1426年11月初頭	100→200dL	150dL	100dL以下			<i>Sutah</i> vol.4, 734
第7月	1427年4-5月	150dL以下	1/7dinar				<i>Sutah</i> vol.4, 744
第11月下旬	1427年9月後半	200dL→150dLに公定	150dL	130dL以下	1/2dL		<i>Sutah</i> vol.4, 750
831年初頭	1427年10月下旬	170dL以下	130dL以下				<i>Sutah</i> vol.4, 764; <i>Iqd.</i> 340

832年 第4月1日 第4月 第6月 第7月 第9月 第11月 第12月	1427年11-12月 1428年3-4月 1428年4-5月 1428年4-5月 1428年6-7月 1428年8-9月 1428年9-10月 1429年1月8日 1429年1-2月 1429年3-4月 1429年4月6日 1429年4-5月 1429年7月4日 1429年8月後半 1429年11-12月	140dL 140dL 140dL以下 140→160dL 100→160dL 260dL 300dL以上 400→350dL以下 400→450→500dL 450→*900dL 500→*280dL 240dL以下 220→*900dL 250dL以下 270→*300dL 360dLで購入強制 250dL	70dL 90dL 90dL 160dL 100→160dL 200dL以上 260dL 300dL 180→300dL 180→300dL	70dL 90dL 90→125dL 90→125dL 200dL以上 230dL 300dL 180→300dL 180→300dL 130dL以下 130dL以下 130dL以下	130dL 140dL 140dL 150→90dL	Sutahk.vol.4, 766 Iqd, 328 Sutahk.vol.4, 776 Sutahk.vol.4, 778 Iqd, 310 Sutahk.vol.4, 780, Iqd, 328, 340 Sutahk.vol.4, 782, Iqd, 328 Sutahk.vol.4, 783, Iqd, 328 Sutahk.vol.4, 794 Iqd, 353 Sutahk.vol.4, 799 Sutahk.vol.4, 800, Iqd, 354 Sutahk.vol.4, 801 Sutahk.vol.4, 804 Sutahk.vol.4, 810 Sutahk.vol.4, 820 Sutahk.vol.4, 820
833年 第3月 第4月 第7月 第8月	1429年12月-1430年1月 1430年3-4月 1430年4-5月 1430年9-10月 1430年10-11月	200dL以下 150dL以下 172dinar 130dL 130dL以下	70dL以下 174dinar 50dL 80dL以下	110dL 90dL 90dL以下 60dL 80dL以下	Sutahk.vol.4, 830, Iqd, 379 Sutahk.vol.4, 832, Iqd, 379 Sutahk.vol.4, 850 Sutahk.vol.4, 851 Sutahk.vol.4, 872 Ihba, vol.3, 501 Iqd, 435, 36	
834年 第1月 第2月	1432年8月 1433年8月	200→170→175dL 130dL以下 100→130dL 140→150dL	180→185dL 80dL以下 60→80→90dL	170→180→140dL 80dL以下 60→80→90dL	Sutahk.vol.4, 880 Sutahk.vol.4, 888 Sutahk.vol.4, 893 Sutahk.vol.4, 894 Sutahk.vol.4, 902 Sutahk.vol.4, 904 Sutahk.vol.4, 919 Sutahk.vol.4, 920 Sutahk.vol.4, 933	
835年 第10月 第11月	1432年8月-1433年8月 1432年8月 1433年8月後半 1433年9月後半 1434年5-6月 1434年7月初旬 1434年9-10月 1435年10-11月	1432年8月 1433年8月 1433年8月後半 1433年9月後半 1434年5-6月 1434年7月初旬 1434年9-10月 1435年10-11月	150以下→170dL 200dL 175dLで購入強制 210dL	140dL 170dL 210dL	Sutahk.vol.4, 964, Iqd, 467	

dt.: dirham min ahtulus
Sutahk: Al-Magrizi, al-Sutahk
Ihba': Ibn Hajar, Ihba' al-ghumr
Iqd: Al-Ayni, Iqd al-jumma